



「愛しています」プレゼントを遺して去っていく

「空っぽの器友の会」会長・シャチホコ記念代表 彦田かな子

小林麻央さんが亡くなりました。私はあんな直前まで笑顔を発信できるだろうか？なぜあんなに満たされた笑顔でいられたのか。さあ、私はどう生きていこう。本気で生きるとはどういうことなのか、それがどんなに美しいものなのかを言葉だけでなく、その存在で全国・全世界へ発信してくださいました。悲しい気持ちや答えのない疑問があるときほど、目の前にある一つ一つの小さなやるべきことを丁寧にやることで、答えは出なくとも私はずいぶん心が軽くなります。朝起きて家族との「おはよう」の挨拶、トイレ掃除、靴並べ、食事の時に普段使わない箸置きを使ってみたり、、、そして1年半前より毎月開催させてもらっている「シャチホコ記念カフェ」に感謝しながら関わっていくことなど。深く呼吸をして本気で美しく「品性のある生き方」を考えながら、今日も丁寧に「今日という日の花を摘む」ことに愛を注いで生きていこうという気持ちを、麻央さんの逝去から強く感じました。

2017/7/25 樋野興夫先生
ボストンにて講演の様子



がん哲学外来家族カフェの必要性

目白がん哲学外来カフェ代表・「空っぽの器友の会」副会長 森尚子

先日、田口桂子さん（OCC カフェスタッフ）よりこんな要望があった。「患者本人も苦しいけど、家族の苦しみも深く 家族の心のケアについて「空っぽの器ニュースレター」で取り上げて欲しい」と。目白カフェでも家族の方々の苦しみは深く 私自身気になっていた。現在桂子さんのご主人（悪性リンパ腫寛解一年）は治療を終え、経過観察中である。

桂子さんは語った。

家族は自分が代わってあげたい 治療の苦しみを代わって受けられたらと苦しむ。どうすることもできない状況でただただ祈ることしかできない。結果悲しみと無力感で自分が病人になってしまったと。そんな時にとにかく話を聞いて欲しい。支えて欲しい。辛い大変な時期を乗り越えた桂子さんは 今つくづく場の設定の必要性を痛感され、辛い中にある家族の力になりたいと考えている。『家族だけのカフェ』 そんなもう一つのカフェがあったら、そこでもこれまでのカフェと変わらないぐらい深い言葉が語られるであろう。

8月下旬 樋野先生の最新著書『がんばりすぎない、悲しみすぎない「がん患者の家族」のための言葉の処方箋』が発売される。多くの家族の方々の拠り所になるだろう。桂子さんも心待ちにされている。

空っぽ

特別寄稿 たまプラーザがん哲学外来カフェ代表 和田眞

「利他的行動」に富む女性の皆さんによって、素晴らしい「空っぽの器」友の会が設立された。人一倍「利己的行動」に富み、存在意味がなくなった、将に、みすばらしい「空っぽの器」の老兵に、ニュースレターの原稿依頼が迷い込んだ。引き受けさせていただいたのは、人後に落ちない「感性」豊かな、図々しい性格の表れかもしれない。樋野先生のおっしゃる「利他性と鈍感性」の学びの哲学的意義は難しい。

「空」とは、「無」を意味するのではなく、物事は常に他の要素に依って存在し、他者と関係性を持たないものは存在しない、という意味である。相互につながり、依存し合っている。つまり、「空」が意味するのは「相関性」なのである。

「空っぽの器」に、良い出会い（恩師、友人、本、3つの邂逅、これらに配偶者と親？）によって養分と水をたっぷり入れてもらい、重くなっても絶対に破れない「頑丈な器」を作り上げる。「空っぽのランドセル」を「重いランドセル」にするには、「学歴」の「学」と「歴」の間に「習」を挿入した「学習歴」が大事だ。この「学習歴」は、良い出会いによる養分と水に相当する。

「空っぽの器」は、いつまでも「空っぽ」ではない。そこに人が集まり 良い出会いが成立、こころが満たされて、自然に「相関関係」が出来上がる。「空」というのは「おかげ」という意味、目の前にない、うしろのつながり、これからの実り方の方向を指す。自分を犠牲にしても他人の利益を図る、世のため人のために尽くす、そのためには自らが「人のため」に鈍感になる。人類の文明社会が生き残る唯一の道、人間社会を考える上での視座の拡大が、「空っぽの器」友の会の設立にあるように思う。今後の益々の発展を祈念いたします。



編集者：青柳志保 shiho@loop-jp.tv

一般社団法人がん哲学外来ホームページ

<http://www.gantetsugaku.org/>